処方番号：202D　　**処方名**：八解散（はちげさん）

処方構成：
半夏 3、茯苓 3、陳皮 3、大棗 2、甘草 2、厚朴 6、人参 3、藿香 3、白朮 3、生姜 2

用法・用量：
湯

しばり：
体力虚弱で、胃腸が弱いものの次の症状

効能・効果：
発熱、下痢、嘔吐、食欲不振のいずれかを伴う感冒

原典：太平恵民和剤局方
出典：

解説：
『衆方規矩』に「四時の傷寒、頭痛、壮熱、風に感じ、汗多くして嘔逆し胸悪きを治す。」と記載されている。これは六君子湯に藿香、厚朴を加えたものである。六君子湯適応症の人で感冒にかかったときに応用に機会がある。脾虚証（消化器が虚弱）の場合麻黄が胃に泥み葛根湯など麻黄剤が服用出来ない場合がある。この様なタイプの人の感冒に本処方を応用する。すなわち胃腸が極度に弱い人の感冒薬である。

胃腸の弱い人では太陽病期、少陽病期、陽明病期いずれの時期にも応用可能であるが、少陽病期で熱状が強い場合は参胡三白湯加竹茹麦門冬、陽明病期で熱状が強い場合は参蘇飲を用いることもある。

202D.八解散

参考文献名	半夏	陳皮	甘草	人参	白朮	茯苓	生姜	大棗	厚朴	藿香	葱白	用法・用量
実用漢方処方集　注1	3	3	2	3	3	3	2	2	6	3		

注1
感冒そのほかの急性熱病で熱高く汗出て、あるいは吐や下痢を兼ね、食欲不振、顔色蒼黄く倦怠感強きもの

処方番号：203　　**処方名**：立効散（りっこうさん）

処方構成：
細辛 1.5-2、升麻 1.5-2、防風 2-3、甘草 1.5-2、竜胆 1-1.5

用法・用量：
湯（口に含んでゆっくり飲む）

しばり：
体力に関わらず用いられる。

効能・効果：
歯痛、抜歯後の疼痛

原典：蘭室秘蔵
出典：

解説：
『衆方規矩』にある東垣の方であり、牙歯疼痛を治す神方であるといわれる。

203.立効散

参考文献名		細辛	升麻	防風	甘草	竜胆
診療医典		2	2	2	1.5	1
活10巻11号	注1	1.5	1.5	3	2	1.5
処方分量集		記載なし				
漢方あれこれ		記載なし				
後世要方解説		記載なし				

注1 活10巻11号(1969年2月号)に五味立効散についての解説あり。

処方番号：204　　**処方名**：竜胆瀉肝湯（りゅうたんしゃかんとう）

処方構成：

当帰5、地黄5、木通5、黄芩3、沢瀉3、車前子3、竜胆1-1.5、山梔子1-1.5、甘草1-1.5

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度あるいはそれ以上で、下腹部に熱感や痛みがあるものの次の諸症

効能・効果：

排尿痛、残尿感、尿の濁り、こしけ、頻尿

原典：蘭室秘蔵

出典：薛氏十六種

解説：

本方は膀胱および尿道における炎症に用いるもので、実証に属し、急性あるいは亜急性の淋毒性尿道炎、バルトリン腺炎、あるいは膀胱炎などで小便渋通、帯下のあるもの、また膿尿、陰部腫痛、鼠蹊腺が腫れているものなどに用いる。一般に体力が未だ衰えず、脈も腹部も相当に力があるものを目標にする。

なお、次掲の同名異方の一貫堂家方、竜胆瀉肝湯は四物湯と黄連解毒湯との合方、温清飲を基本にしている。一方、この方は薛氏・竜胆瀉肝湯に芍薬、川芎、黄連、黄柏、連翹、薄荷、防風を加味したものであって、やや慢性症のものに用いられる。

竜胆瀉汗湯（一貫堂家方）の処方

生薬名 / 参考文献名	当帰	地黄	木通	黄芩	沢瀉	車前子	竜胆	山梔子	甘草	芍薬	川芎	黄連	黄柏	連翹	薄荷葉	防風	山帰来	薏苡仁	用法・用量
処方分量集	1.2	1.2	1.2	1.2	2	1.2	2	1.2	−	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	−	−	
基礎と診療	1.5	1.5*	1.5	1.5	2	1.5	2	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	2	
漢方処方集	1.5	1.5*	1.5	1.5	2	1.5	2	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	2	
漢方処方	1.5	1.5	1.5	1.5	2	1.5	2	1.5	−	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	−	−	

＊ 熟地黄

204.竜胆瀉肝湯

参考文献名		当帰	地黄	木通	黄芩	沢瀉	車前子	竜胆	山梔子	甘草	用法・用量
診療医典	注1	5	5	5	3	3	3	1	1	1	
治療の実際	注2	5	5	5	3	3	3	1.5	1.5	1.5	
処方解説	注3	5	5	5	3	3	3	1.5	1.5	1.5	
応用の実際		5	5	5	3	3	3	1.5	1.5	1.5	
漢方大医典		5	5	5	3	3	3	1.5	1.5	1.5	

注1　本方は急性あるいは亜急性の淋疾，陰部痒痛，子宮内膜炎(こしけ)，軽度の横根，睾丸炎，陰部湿疹，膀胱炎(水腫)，わきが，などに応用される。あるいは慢性淋疾による不妊症，軟性下疳などにも用いる。

注2　本方は利尿作用の他，消炎，解熱，鎮静の作用があるから膀胱炎，バルトリン氏腺炎，陰部の潰瘍および湿疹，子宮内膜炎などに用いられる。

注3　帯下と尿道炎，トリコモナス，尿道淋，肝硬変症。

注3　鼠蹊リンパ腺炎

備考：なお和剤局方に記す竜胆瀉肝湯は，竜胆草，柴胡，沢瀉を各1𦬊，車前，木通，生地黄，当帰尾，梔子，黄芩，甘草各5分の10味からなり，これらを合わせて粉砕し，これに清水を大盃で3杯加え，1杯になるまで煮つめて，食間に温服するものとしている。

処方番号：205　　**処方名**：苓甘姜味辛夏仁湯（りょうかんきょうみしんげにんとう）

処方構成：
茯苓 1.6-4、甘草 1.2-3、半夏 2.4-5、乾姜 1.2-3、杏仁 2.4-4、生姜 0.6-2、五味子 1.5-3、細辛 1.2-3

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度以下で胃腸が弱り、冷え症で痰が多いものの次の諸症

効能・効果：
気管支炎、気管支喘息、動悸、息切れ、むくみ

原典：金匱要略
出典：

解説：
小青竜湯の麻黄・桂皮・芍薬を去り、茯苓・杏仁を加えた処方で、発熱・悪寒・頭痛・身体疼痛（以上表証）の症状がなく、貧血や体が冷える傾向（以上裏証）がある人に用いる。小青竜湯と同じような症状に使われるが、体質虚弱と胃腸が弱いものを対象としている。それで「小青竜湯の虚証の薬方」とか「小青竜湯の裏の処方」といわれている。

205.苓甘姜味辛夏仁湯

参考文献名		茯苓	半夏	杏仁	五味子	甘草	乾姜	生姜	細辛	用法・用量
漢方診療医典	注1	4	4	4	3	2	2		2	
漢方処方応用の実際	注2	4	4	4	3	2	2		2	
金匱要略入門		4	2.5	2.5	2.5	3	3		3	*1
新版漢方医学＜創元医学新書＞	注3	4	4	4	3	2	2		2	
症候による漢方治療の実際	注4	4	4	4	3	2	2		2	
漢方治療百話	注5	4	4	4	3	2	2		2	
漢方治療百話	注6	4	4	4	3	2	2		2	
経験・漢方処方分量集		4	4	4	3	2	2		2	
改訂新版漢方処方分量集	注7	4	5	3	3	3	3		3	*2
増補改訂漢方入門講座上・下	注8	2	2.5	2.5	1.5	1.5	1.5		1.5	
新撰類聚方	注9	4	5	3	3	3	3		3	*3
漢方薬入門	注10	4	4	4	3	2	2		2	
現代漢方入門	注11	4	4	4	3	2	2		2	
漢方古方要方解説		1.6	2.4	2.4	2	1.2	1.2		1.2	*4
漢方精撰百八方	注12	4	4	4	2	2	2		2	
成人病の漢方療法	注13	4	4	4	3	2	2		2	
1000万人の漢方診断と治療の実際	注14	4	4	4	3	2	2		2	
実用漢方療法	注15	4	4	4	3	2	2		2	

*1　以上7味を水1000銖をもって煮て300銖となし、ろ過し50銖を温服すること日に三回せよ。
*2　水400を以て煮て120に煮つめ1回20づつ1日3回服用。便法：水半畳で常煎法
*3　右七味、以水一斗、煮取三升、去、温半升、日三服
*4　この7味を1包と為し、水二合を以て、煮て6勺を取り、滓を去りて一回に温服す（通常1日2、3回）

注1

喘鳴、息切れ、貧血があり、冷え性で、疲れやすいものを目標。肺気腫、慢性気管支炎、気管支喘息、心臓弁膜症、慢性腎炎などに用いる。

注2
気管支炎、気管支喘息、肺気腫、腎炎、ネフローゼ、心臓性喘息、百日咳などに使用

注3
小青竜湯の証に似ていて、貧血の傾向があり、脈弱く、手足冷えやすく、息切れ、喘鳴などのあるもの。慢性気管支炎、気管支喘息、肺気腫、心臓弁膜症

注4
小青竜湯を用いるような場合で、脈が弱くて、冷え性で、貧血の状があり、麻黄剤を用いることができないものに用いる。

注5

小青竜湯の証に似ていて、喘鳴、咳嗽、希薄水様の痰を喀出するが、発熱や、悪寒、頭痛などは無く、貧血の傾向があり、寒がって手足の冷えるものの、脈弱く、胃腸の弱い人にはこの処方が良い。

注6

軽度の肺水腫や肺気腫に用いられる。呼吸困難、咳喘があって、喀痰が希薄、貧血、軽度の浮腫があり脈の微弱のものに用いる。心下痞堅ではない。

注7
便法：水半畳で常煎法　目標・応用：痰飲浮腫もの。

注8
苓甘姜味辛夏湯に杏仁を加えたことはいうまでも無いが、之を小青竜湯と比較すると非常に接近している。 浮腫、腹水に使用。

注9
小青竜湯の適応症で、虚寒のものに使う。腎炎ネフローゼ、萎縮腎、尿毒症、動脈硬化症、脳出血後の半身不随、脚気、心臓不全、心臓性喘息、栄養失調などで浮腫し、脈沈手足冷え小便不利し、或いは喘咳或いは腹水を伴うもの、気管支炎、気管支喘息、肺気腫、百日咳などで咳して顔がむくみ、足冷え小便不利胃部振水音咳によって嘔く等があるもの。

注10

目標：薄い痰の出る咳、胃腸弱い、手足冷、顔面浮腫、貧血、自汗、呼吸困難　　応用：慢性気管支炎、気管支喘息、肺気腫、百日咳

注11
痰の切れ、息切れ、肌のカサカサ改善

注12

この方は金匱要略痰飲咳嗽門に苓桂味甘湯、苓桂五味姜辛湯、苓甘姜味辛夏湯、本方、苓甘姜味辛夏仁黄湯の一連五類方が掲げられ、吸い毒による咳嗽、吃.逆、心悸亢進、浮腫肉(月閏)筋惕等の症候群が述べられている。これらは表証なく、虚証の傾向あるものである。

注13

慢性気管支炎、気管支拡張症、肺気腫に用いる処方である。貧血で胃腸の弱い人は小青竜湯のような麻黄の入った処方を飲むと、食欲が減り、かえって疲れが出る。このような患者に用いる。肺気腫を伴っている老人に用いる機会が多い。

注14
本方は小青竜湯の裏の処方で、痩せて血色が悪く、発作のないときでも階段をのぼったりすると息が切れ、腹に力が無く、冷え性で気力の乏しいものに用いる。肺気腫を伴っている気管支喘息に用いる場合が多い。顔色の悪い気力に乏しい虚弱タイプで動悸、息切れ、浮腫などのある慢性腎炎」、ネフローゼに用いる。本方は小青竜湯の裏の処方である。

注15
体力がかなり衰えていて、咳がひどく、うすい痰が多い。疲れが激しく、呼吸困難がかなり強い。

処方番号：206　　**処方名**：苓姜朮甘湯（りょうきょうじゅつかんとう）

処方構成：
茯苓 6、乾姜 3、白朮 3、甘草 2

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度以下から虚弱で、腰から下肢に冷えと痛みがあって、尿量が多いものの次の諸症

効能・効果：
腰痛、腰の冷え、夜尿症、神経痛

原典：金匱要略
出典：

解説：
甘草乾姜湯を原方とされている。本方は腰冷えに対する薬方である。苓桂朮甘湯の桂枝が乾姜に、人参湯の人参が茯苓にそれぞれ変わっているところからもその用方が解る。本方は上衝がなく、水毒は下半身に集まる。また乾姜からして冷寒に対する温補の作用も強い。したがって裏寒を目標として腰から下がはなはだしく冷え重く、尿量は水のように薄くて多量なる者を目標とする（甘草乾姜湯＝甘草 4 乾姜 2：遺尿、小便数に用う）。

206.苓姜朮甘湯

参考文献名		茯苓	乾姜	白朮	朮	甘草
処方分量集		6	3	3	−	2
診療の実際	注1	6	3	3	−	2
診療医典	注2	6	3	3	−	2
症候別治療		6	3	−	3	2
処方解説	注3	6	3	3	−	2
応用の実際	注4	6	3	−	3	2
明解処方		6	3	−	3	2
漢方処方集		4	4	2	−	2
漢方入門		4	4	2	−	2
実用漢方療法		6	3	3	−	2
基礎と診療		4	4	2	−	2
金匱要略入門		4	4	2	−	2

注1 水中に坐するが如き腰冷感，身体重感を目標にして用いられる。小便は稀薄で量が多い。

注2 水中に坐するが如き腰冷感と，尿が清澄で量の多いのを目標に用いる。口渇を訴えることはない。

注3 腰部または腰以下に冷感を訴え，「水中に坐せるがごとく，また五千金を帯ぶるがごとし」という表現のとおりである。また冷えばかりでなく，五千金を帯ぶるがごとく重く感じる。あるいは冷痛する。脈は沈んで細く微で，舌苔や口渇はなく，一般に腹壁は軟かいことが多い。小便不利や頻尿がある。また冷湿，陰下湿とあるように，湿疹のときには薄い分泌物をともなうものである。

金匱要略(五臓風寒積聚病)に，「腎著の病(腰以下の病)ハ，ソノ人身体重ク，腰中冷ユルコト，水中ニ坐スルが如ク形水状(浮腫状)ノ如クニシテ，反テ渇セズ，小便自利，食飲故ノ如シ，病下焦ニ属ス，身労シ，汗出デ，衣(表)裏冷湿シ，久々之ヲ得レバ，腰以下冷痛シ，腰重キコト五千銭ヲ帯ブルガ如シ，甘姜蒼朮湯之ヲ主ル」とある。

注4 腰と腰より下部がひどく冷え，冷感を自覚するものに用いる。「水中に坐するが如く」「腰以下冷痛し，腰重きこと五千銭を帯ぶるが如し」と表現され，腰，脚が冷痛し，腰が重く感じ，尿利が近くて尿量が多く，飲食が変わらない，脈は沈で遅，細，微，腹部は軟弱のものが多い。

処方番号：207　　**処方名**：苓桂甘棗湯（りょうけいかんそうとう）

処方構成：
茯苓 6、桂枝 4、大棗 4、甘草 2

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度以下から虚弱で、のぼせや動悸があり神経がたかぶるものの次の諸症

効能・効果：
動悸、精神不安、ヒステリー

原典：傷寒論、金匱要略
出典：

解説：
苓桂朮甘湯の朮を去り大棗を加えた処方である。下腹部からつきあげてくるような発作性の動悸あるいは疼痛に用いる。

207.苓桂甘棗湯

参考文献名		茯苓	桂枝	桂枝去皮	大棗	甘草	甘草炙
処方分量集		6	4	−	4	2	−
診療の実際		6	4	−	4	2	−
診療医典	注1	6	4	−	4	2	−
症候別治療		6	4	−	4	2	−
処方解説	注2	8	4	−	4	2	−
後世要方解説		−	−	−	−	−	−
漢方百話		−	−	−	−	−	−
応用の実際	注3	6	4	−	4	2	−
明解処方		6	4	−	4	2	−
漢方処方集	注4	8	4	−	4	2	−
漢方入門講座		8	4	−	4	3	−
新選類集方		8	−	4	4	−	2
漢方医学		6	4	−	4	2	−
精撰百八方		4	4	−	4	2	−
古方要方解説		−	−	−	−	−	−
成人病の漢方療法		−	−	−	−	−	−

注1　奔豚症を目標に用いる。奔豚症は今日のヒステリー性の心悸亢進に相当するもので，発作性に下腹部から胸に衝きあげてくるはげしい動悸を訴え，呼吸がとまりそうに覚え，ときには人事不省になることもある。また発作的に，はげしい腹痛を訴えることもある。

注2　臍下の動悸が第一の目標で，これがときどき発作性に突き上げてきて，あるいは胸中つまるごとく覚え，あるいは心下部や下腹部にはげしい痛みを起こし，あるいは嘔吐，あるいは頭痛などを起こすものが目標である。その他の症状としては，心悸亢進，眩暈，頭汗，上衝等があり，尿利減少するものである。脈は多くは浮数で，沈のこともある。腹証としては下腹部の拘急，右腹直筋の攣急がある。

傷寒論（太陽病中篇）（金匱奔豚気病門）に，「汗ヲ発シテ後，其ノ人臍下悸スル者ハ奔豚ヲナサント欲ス，茯苓桂枝甘草大棗湯之ヲ主ル」とあり，……

注3　臍下の動悸が，発作的に突き上げてきて，激しい心悸亢進の起こるもの（奔豚という）に用いる。下腹から起こった動悸は，咽喉までつき上がって来て，呼吸が止まりそうになるほど激しい。発作の時は，丸い球が胸につき上がってくると訴えるものがあり，発作の激しいときは人事不省になることもある。この際腹部の動悸が激しく，腹部全体で動悸し，みぞおちがつまったようになり，呼吸が促迫し，四肢を痙攣さすこともある。

注4　臍下悸し上衝の勢のあるもの，あるいは胃内停水小便不利，胃部疼痛のもの。

処方番号：208　　**処方名**：苓桂朮甘湯（りょうけいじゅつかんとう）

処方構成：
茯苓 6、白朮 3（蒼朮も可）、桂枝 4、甘草 2

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度以下から虚弱で、めまい、ふらつきがあり、ときにのぼせや動機があるものの次の諸症

効能・効果：
立ちくらみ、めまい、頭痛、耳鳴り、動悸、息切れ、神経質、ノイローゼ

原典：傷寒論、金匱要略
出典：

解説：
五苓散と類似した駆水剤である。本方は胃内停水による水証に用いる。したがって、停水による瘀水が気の上衝とともに上衝して起こす水証、のぼせ、めまい、息切れ、心悸亢進、身体動揺感、胃内停水、尿利減少等であり、主として苦情は上半身の水症として現われる。したがって裏熱があるために停水の上逆をみ、吐下、口渇の症状を呈する五苓散とはことなる。本方に熱症はない。なお本方証に虚血証が加わる場合に用いる連珠飲は、本方と四物湯との合方である。本方には類似方が多く方中の桂枝の替りに乾姜を加えた苓姜朮甘湯、白朮の替りに生姜を加えた茯苓甘草湯、白朮の替りに大棗を加えた苓桂甘棗湯、白朮の替りに五味子を加えた苓桂味甘湯等である。

『方函類聚』に「支飲を去るを目的とす。気咽喉に上衝するも目眩するも手足振掉するも皆水飲によるなり、起則頭眩と云うが大法なれども臥して居て、眩暈する者にても心下逆満さえあれば用いるなり、夫れにて治せざる者は沢瀉湯なり、彼方はたとい始終眩なくしても胃眩と云うもので、顔がひっぱりなどする候あるなり、又此方没食子を加えて喘息を治す。又水気より来る瘻蹙に効あり失張足ふるい、或は腰ぬけんとし劇者は臥して居ると脊骨の辺にひくひくと動き、或は一身中脉の処ひくひくとして耳鳴逆上の候ある者也」とある。（瘻蹙＝あしなえ）

208.苓桂朮甘湯

参考文献名		茯苓	桂枝	白朮	甘草	朮
処方分量集		6	4	3	2	
診療の実際	注1	6	4	3	2	
診療医典	注2	6	4	3	2	
症候別治療		6	4	−	2	3
処方解説	注3	6	4	3	2	
応用の実際	注4	6	4	3	2	
明解処方		6	4	−	2	4
漢方処方集		4	3	2	2	
漢方入門		4	3	3	2	
実用漢方療法		6	4	3	2	
基礎と診療		4	3	2	2	
診かた治しかた		6	4	3	2	
漢方大医典		6	4	3	3	

注1 眩暈と身体動揺感および心悸亢進とを目標にし諸症證に応用される。患者の顔色はやや貧血性で，脈は沈緊，あるいは沈緊でなくても相当に力がある。腹部は屢屢振水音を聞き，また動悸の亢進を触れ，尿利減少がある。

注2 心下に水毒が停滞し，尿利減少して，気上衝し，めまい，身体動揺感，心悸亢進などのあるものを目標として用いる。これらの症状は真武湯証に似ているが，真武湯症は陰証であり，本方は陽証であるから，脈に力があり，腹部には振水音を証明しても，腹力があって，軟弱ではない。

注3 いわゆる虚証で水毒によって起こる。主訴は眩暈，身体動揺感，起立性眩暈，息切れと心悸亢進，上衝，頭痛等である。尿利減少と足冷がある。脈は沈緊で，腹部は軟弱のほうで，胃内停水があり，あるいは膨満することもある。

餐英館療治雑話には，「此方癇症，腹内動悸ツヨク，少腹ヨリ気上リテ胸ニ衝キ，呼吸短息，四肢拘急ナドスル証ニ効アリ。又心下逆満シテ，起テバ頭眩シ，動悸アルヲ標的トスレドモ，顔色鮮明ニシテ表ノシマリ宜シカラズ，第一脈沈緊ナル者ニ非ザレバ効ナシト云フ，是レ和田家ノ秘訣ナリ」とある。

注4 心下に停水(水毒)があって動悸，めまい(眩暈)の激しいものに用いる。たちくらみ，めまい，身体動揺感など程度の差はあるが，めまいが主訴である。同時に，息切れと心悸亢進，頭痛，上衝などがあり，尿利が減少する。脈は沈緊で，腹部は全体に軟弱で心下部に振水音をみとめたり，膨満ぎみになったりする。また臍の近くで腹部大動脈の拘動が亢進するものが多い。

処方番号：208A　　**処方名**：明朗飲（めいろういん）

処方構成：
茯苓 4-6、細辛 1.5-2、桂枝 3-4、黄連 1.5-2、白朮 2-3、甘草 2、車前子 2-3

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度で、ときにめまい、ふらつき、動悸があるものの次の諸症

効能・効果：
急・慢性結膜炎、流涙

原典：浅田家方
出典：

解説：
『勿誤薬室方函』に「風眼を治す。・・即ち苓桂朮甘湯方中に車前子、細辛、黄連を加う。」と主治の記載があり、口訣に「この方は風眼のみならず、逆気上衝、眼中血熱、或いは翳（かげ）を生ずる者を治す。今、眼科用ゆる処の茱萸湯（ふいとう）、排雲湯（はいうんとう）、皆この類方なり。」との記載がある。風眼とは流行性結膜炎のことである。目の急性炎症に用いる。しばしば菊花を加えて用いることがある。又最近ではアレルギー性の結膜炎にも用いて効果を認めている。アレルギー性結膜炎では眼瞼の痒みも強く訴えるので本方に荊芥連翹を加え、時には竜胆も加味して用いている。

208A.明朗飲

参考文献名		茯苓	桂枝	白朮	甘草	車前子	細辛	黄連	用法・用量
漢方診療の実際	注1								*1
臨床応用漢方処方解説	注2	6	4	3	2	○	○	○	*2
経験漢方処方分量集		6	4	3	2	2	2	2	*3
改訂新版漢方処方集	注3	4	3	2	2	2	2	2	
明解漢方処方	注4	6	4	4	2	3	1.5	1.5	*4
実用漢方処方集(経)	注5	6	4	3	2	2	2	2	*5
実用漢方処方集(龍)	注5	4	3	2	2	2	2	2	
漢方処方大成(和田泰庵方函)		○			○	○	○	○	*6
漢方処方大成(漢方診療医典)		6	4	3	2	3	1.5	1.5	

*1 苓桂朮甘湯に車前子、細辛、黄連をくわえたもの
*2 苓桂朮甘湯に車前子、細辛、黄連を加えたもの。
*3 東郭 (苓桂朮甘湯加車前子 細辛 黄連 各二.○)
*4 苓桂朮甘湯に車前子3、細辛、黄連各1.5を加えた処方
*5 (勿誤薬室方函)即苓桂朮甘湯方中加車前子細辛黄連
(経験漢方処方分量集)苓桂朮甘湯加車前子、細辛、黄連各2.0
*6 大黄も加える

注1
慢性症に多く用いられる。差明、発赤、流涙があり、脈は沈んで心下部に拍水音があり、動悸、眩暈などあるものに良く奏効する。・黄散を兼用することが多い。

注2
眼科一般、視力障害、網膜炎などに用いることがある。

注3
充血性眼病

注4
水毒が上逆して眼疾を発し、眼痛み赤脉を生じ、流涙して開くことができない症にしよう。慢性、急性結膜炎

注5
充血性眼病に使用

処方番号：208B　　**処方名**：定悸飲（ていきいん）

処方構成：
李根皮 2、甘草 1.5-2、茯苓 4-6、牡蛎 3、桂枝 3、白朮 2-3（蒼朮も可）、呉茱萸 1.5-2

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度あるいはそれ以下で、ときにめまい、ふらつきのぼせがあるものの次の諸症

効能・効果：
動悸、不安神経症

原典：多紀櫟窓・見聚方要補
出典：

解説：
「奔豚気を治す」奔豚というのは、気が下腹から心下に突き上げ、動悸して呼吸も絶えなんばかりに苦しむ状をさしている。すなわち臍下から豚が奔走するごとき発作という意味であり、発作性心悸亢進のことである。ヒステリーの発作もさしている。神経性心悸亢進症、ヒステリー球に最もよく用いられる。

208B.定悸飲

参考文献名	李根皮	茯苓	桂皮	白朮	朮	呉茱萸	甘草	牡蛎	用法・用量
漢方診療医典	2	6	3		3	1.5	1.5	3	
経験・漢方処方分量集　注1	2	6	3		3	1.5	1.5	3	
改訂新版漢方処方分量集　注2	2	4	3	2		2	2	3	

注1
櫟窓

注2
奔豚、発作性心悸亢進

処方番号：208C　　**処方名**：連珠飲（れんじゅいん）

処方構成：
当帰 3-4、白朮 2-4（蒼朮も可）、川芎 3-4、甘草 2、芍薬 3-4、地黄 3-4、茯苓 4-6、桂枝 3-4

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度あるいはそれ以下で、ときにのぼせ、ふらつきがあるものの次の諸症

効能・効果：
更年期障害、めまい、動機、息切れ、貧血

原典：内科秘録
出典：

解説：
本方は苓桂朮甘湯と四物湯の合方である。更年期障害等に伴う自律神経症状を目標として用いる。また、出血や貧血によって起こる諸症状にも用いる。すなわち動悸・眩暈・耳鳴・顔面浮腫などである。ただし口唇・眼結膜・爪の下までも白くなるほどのひどい貧血・胃腸虚弱で下痢しやすいものには用いられない。本方をのんで食欲不振となったり、下痢したりするものは適応症ではない。そのときは参苓白朮散を与えて、下痢を治してから他の処方を考えるべきである。